



## 倉本 聰の講演を聞く

三宅医院 三宅 規之

(尾道市医師会広報 2016.7 No.470より転載)

趣味は何ですか?と聞かれると、ゴルフしかしていない。たまに読書するぐらいで、文化的なことは何もしていません。何かしないといけないなあ、と思っている時、新聞に福山文化大学の広告が出ていました。18,000円で年に7回かの講演を受講できるそうで、たまには文化的な話を聞こうと、早速申し込むことにしました。ところが、3月、4月と予定があわず、やっと5月に行けたのが、倉本 聰の「当たり前暮らしを求めて」という講演でした。

倉本氏は、昭和10年生まれ、東京大学文学部卒業の作家、脚本家、劇作家、演出家で代表作に「北の国から」、「前略おふくろ様」、「駅STATION」など多数あり、役者やシナリオライターを養成する私塾「富良野塾」を主宰されたことでも有名な方です。

倉本氏は、少年時代に戦争を体験し、欲しがりません 勝つまでは、というのを徹底的にたたき込まれて、その標語は骨の髄まで深く彫り込まれ、忠実にしたがったそうです。戦後、この標語はもう守らなくて良くなったけれど、欲しくても世の中どん底で手に入る物なんて何もない時代を過ごしたため、青年時代も「欲しがりません」という強い言葉があたりまえとして残っていたそうです。その後の急速な経済成長の中、気がつけば、これまでとは真逆のこと「欲しがりなさい」と国中が言い出し、自分には、とてつついていけない違和感を持ったそうです。戦後、アメリカと一緒に資本主義が入ってきた時、担任の先生に、資本主義って何ですか、と聞いたところ、「こわれる物を作りなさい、いうことだ」と教わりました。それは、少しの我慢もしない、欲望だらけのおかしな世界になる不安を感じさせるものでした。昔の義務ばかり押しつけられた時代から、権利ばかり主張する時代になり、自分は悪くない、何でも他人が悪い、と言ったモンスター〇〇〇〇の時代、もしくは、何でも自分は悪くないと主張する、ごまかしの時代になっている、と感じておられ

ました。

一方、昔、父親と一緒に一晩を外で過ごした時の、暗闇の怖さや静けさ、風、水や虫の音や臭い等を通じて、闇は神聖かつ尊厳なものと思われ、電気の発達で闇が削り取られていくことに、かなり抵抗を感じ、また、電気のために石炭、石油、しいてはウランなどの自然の資源を浪費して枯渇への道をひたすら歩んでいる事に対し、人々が自然を忘れていくさびしささえ感じられていました。また、戦時中、田舎に疎開し、何もない生活を経験したこともあり、何もない田舎に住みたくなった事から富良野に移住したそうです。

そこでの生活から作った「北の国から」というドラマの反響が強く、多くの人から富良野で暮らせないか、勉強できないか、といった手紙を貰ったこと、自分を育ててくれた芸能界への恩返しもあり1984年「富良野塾」を始められました。その時の起草文が「あなたは、文明に麻痺していませんか?車と足はどちらが大事ですか?石油と水はどちらが大事ですか?知識と知恵はどちらが大事ですか?理屈と行動はどちらが大事ですか?批評と創造はどちらが大事ですか?あなたは感動を忘れていませんか?あなたは結局なんののかんのかいいながら、我が世の春を謳歌していませんか?」だったそうです。始めた、と言っても電気も何も無く、春から秋の農繁期だけ農家の手伝いをしながらの時給自足での生活で、ある日、リーダーが「1日一人の食費が280円しか出せないんですが、どうしましょうか?」と聞いてきたので、それでやらなきゃなんないだろうと言われ、事実、それでやってきたそうです。そんな中、農家は農産物の4割方を規格外として捨てていたそうで、ある日、いついどこに捨てに行く、との電話がかかってくると、皆で先回りして捨てられるのを待って、拾って帰る。直接いただくのは農協が許してくれないけれど、捨てたものを拾うのは、勝手にしなさい、とのことで、結構周りの協力もあり、

有り難かったそうです。

現在は、高齢になられ2010年に26年続けた富良野塾を閉塾したけれど、卒業生を中心に「富良野GROUP」を立ち上げ、舞台公演を中心に活動しながら、「富良野自然塾」で、ゴルフ場跡地に植樹して元の森に還す自然返還事業や環境教育プログラムにも尽力されています。

私は、昭和32年生まれなので、欲しがりません、勝つまではとか、その後の欲しくても何もない時代を知らず、すでに復興というか急成長時代に入ってから生まれました。テレビ放送が始まったのが昭和28年なので、すでにテレビ、洗濯機、冷蔵庫の3種の神器の時代でした。その後も自動車、パソコン、インターネット、携帯

電話、スマホをはじめ、次々に新しい物が開発され、「欲しがりなさい」にどっぷりつかっています。自転車で行けばいい所も、車で行ってしまいます。家族同士の連絡はLINEです。今更、何もない時代に戻れ、と言われたとしても、とてもできません。それでも、何でもあって便利すぎる今の社会はおかしいと思っています。便利すぎ、進歩しすぎのために、結婚願望や生殖願望がなくなり、少子化になってきているとか、人間が退化しているのでは、と思うのは言い過ぎでしょうか。「当たり前暮らし」ってどういうものでしょうか?そんな事を考えさせてくれる講演でした。

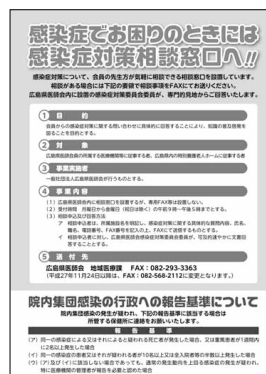
## 感染症でお困りのときには「感染症対策相談窓口」へ!

このたび広島県医師会では、平成17年冬より設置の「特別養護老人ホーム向けの施設内感染相談窓口」を拡充し、新たに「感染症対策相談窓口」を設置いたしました。

感染症対策について、会員の先生方が気軽に相談できる相談窓口として、ご活用いただけますと幸いです。

寄せられた相談内容等につきましては、施設名等個人が特定できる情報を除き、県内の感染症対策の発展のため有効に活用させていただく場合がございますことご了承ください。

なお、院内スタッフ向けのポスターを広島県医師会ホームページ「広島県医師会からのお知らせ」へ掲載しておりますので、ご活用ください。



### 感染症対策相談窓口事業実施要項

1. 目的  
会員からの問い合わせに具体的に回答することにより、知識の普及啓発を図る。
2. 対象  
広島県医師会員の所属する医療機関・施設に従事する者
3. 事業実施者  
一般社団法人広島県医師会が行うものとする。
4. 事業内容
  - (1) 広島県医師会内に相談窓口を設置するが、専用FAX等は設置しない。
  - (2) 受付時間 月曜日から金曜日(祝日は除く)の午前9時～午後5時までとする。
  - (3) 相談申込及び回答方法
    - ア 相談申込者は、所属施設名を明記し、感染症対策に関する具体的な質問内容、氏名、職名、電話番号、FAX番号を記入の上、FAXにて送信するものとする。
    - イ 相談申込者に対し、広島県医師会感染症対策委員会委員が、可及的速やかに文書で回答することとする。
5. 送付先 広島県医師会 地域医療課 FAX: 082-568-2112